

第9回企画展「帝銀事件と登戸研究所」記録  
特別プログラム上映会 映画「帝銀事件 死刑囚」トークショー

山田 朗

明治大学平和教育登戸研究所資料館長

渡辺 賢二

明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門委員

(司会) 塚本百合子

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

---

〔山田〕 それでは時間になりましたので第2部トークショーを始めさせていただきます。映画の方は大変混乱いたしまして皆様にご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。こちらでお座りになれなかった方も他の教室でご覧になることができました。この様子も他の教室で見られるようになっていきます。それでは、ここからトークショーを始めますけれども、開催に先立って、先程もう一回この上映会をやるとご案内いたしました。皆さんはここでご覧いただけた訳ですけれども、めったに最近では見られない映画であるということもありますので、資料館の企画として5月にもう一度この上映会をやりたいと思います。それから、おかげ様で資料館主催の企画展の方も大変多くの方にご来場いただきまして、5月11日(土)まで延長することが決まりました。それに伴いまして、解説会を20人定員でやっていますけれども、なかなか参加できないという方もいらっしゃいましたので、4月から5月にかけてまして解説会を増やして開催し、5月4日(土)は講演会をもう一度やるということで、急遽予定を変更させていただきました。またホームページ・チラシなどでお知らせいたしますので、よろしく願いいたします。それではトークショーを開始いたします。

〔塚本〕 本日司会を務めます塚本と申します。それでは皆さんもうご存知だと思いますが、渡辺先生の方から自己紹介を簡単にお願いたします。

〔渡辺〕 皆さんご苦労様です。渡辺賢二と申します。1987(昭和62)年から登戸研究所を高校生や市民と一緒に調べ始めて、以来ずっと登戸研究所に関わってきました。登戸研究所というのは体験者が私たちに語り継いでくれて明らかになった事が極めて大事で、後

でお話します登研会の人たちが、「資料館を作ってくれ」という要望を出したので明治大学が作ってくれた。そういう経過を含めて、全てに関わってきたので、そういう話をさせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

〔山田〕 資料館館長の山田でございます。私はこの登戸研究所資料館ができる前、2008（平成20）年に資料館を作ると大学が決定しまして、その時から準備室長という形で関わって参りまして、2010（平成22）年に資料館ができてもうすぐ10年になります。また10周年の時には記念のイベントをやりたいと思っています。この登戸研究所資料館というのは、毎年企画展をやっていますが、全くネタに困ったことがない。やればやるほど、次にやらなければいけない課題がでてくる。そういう資料館です。去年（2018年）が帝銀事件発生から70年ということでしたので、帝銀事件を取り上げました。これは戦後史を考える上で重要な事件であって、それに深く登戸研究所と所員が関係していたのではないかということです。資料館の内容も今年の企画を境に、さらに充実させていきたいと思っています。

〔塚本〕 早速ですが、先程の映画にもチラッと第九陸軍技術研究所、つまり登戸研究所が開発したアセトンシアンヒドリンが帝銀事件で使われた毒物ではないかという事で登場しました。山田先生、帝銀事件に登戸研究所はどのように関連していたのでしょうか。

〔山田〕 皆さん、映画の中で登戸研究所、第九陸軍技術研究所のシーンが出てきましたね。あれはここ（明治大学生田キャンパス＝登戸研究所跡地）で撮影したものです。当時（1960年代）、明治大学の（生田）校舎は、登戸研究所時代に建てられた建物がほとんどそのまま残っていて、そこで撮影している。だからセットではなくて本物の登戸研究所で撮影したということになります。

帝銀事件と登戸研究所は大きく分けて2つ、深い関わりがあります。映画の中でも、登戸研究所、第九陸軍技術研究所で開発したとされている、アセトンシアンヒドリン。これは通称、青酸ニトリールと呼ばれている毒物です。映画の中では自決用の毒物という言い方がされておりましたが、正確に言いますと暗殺用の毒物です。スパイが潜入先で要人を暗殺する時に使う毒物として開発されたものです。それは、実際に開発者たちの証言、書かれたものでも明らかになっています。映画の中では、映画にする関係上、実在の人物は、平沢貞通さん以外の実在の人物はみんな実際とは違った名前になっています。例えば、731部隊の指揮官は、この映画の中では岩本中将となっていましたけれども、これはご存知のように石井四郎ですね。佐伯少佐という名前で登場して、最後に手紙で新聞記者たちに、アセトンシアンヒドリンの人体実験について語る場面があります。あれは現実には、新聞記者ではなく、捜査関係者に、登戸研究所の伴繁雄さんという、まさにアセトンシアンヒドリンの開発責任者が語ったものです。ですから、捜査当局は

アセトンシアンヒドリンについて、かなり早い時期から分かっていたということです。

この（事件で使われた）毒物は青酸カリなのか、青酸ニトリール（アセトンシアンヒドリン）なのか。これは非常に重要な問題です。つまり、アセトンシアンヒドリンという軍が開発した特別な毒薬であれば、平沢貞通さんという民間人がそれを手に入れることは絶対に不可能です。ですから、警察もその線（軍関係者）で追っていた訳です。だけど、平沢さんを犯人にするためには青酸カリでなければ駄目なのです。青酸カリであれば当時はメッキ加工用の薬品として、ある意味誰でも手に入るものであった。ですから毒物が何であるのかは、この事件を解明する上で決定的に重要です。ところが、映画の中でもありましたように、やや後から効いてくる毒物という点で、アセトンシアンヒドリン、青酸ニトリールは極めてそれに（その性質に）合致する。そういう点で、登戸研究所と帝銀事件というのは、まず登戸研究所で作られた毒が帝銀事件で使われたのではないかと疑われている。しかし、その様な特殊な毒がどうして外に出たのかというと、それも登戸研究所の所員のハッキリとした証言。これは捜査関係者に語った時の記録がありまして、敗戦の時に参謀本部や陸軍省の関係者が自決用と言ってアンプルで200本から300本を、結構な量ですね、1回の使用分がアンプル1本ですから。それを200本から300本も持ち出したと言う。ところがそれで自決した人はどうもいない。つまり、非常に特殊な毒薬が大量に持ち出されたということがあります。登戸研究所関係者が語っていることなので、まず間違いがない。このように、毒物という点で登戸研究所と帝銀事件は密接な関わりがある。

もう一つは、先程の映画の中でも新聞記者に伝えるという形で出てきますけれども、伴繁雄さんという人が「あれは青酸ニトリールではないか。むしろ、青酸カリではありえない」と捜査関係者に語っている。これが（1948年）4月の段階ですね、事件が起きてから3ヶ月後のことです。ところが、同じ伴繁雄さんが9月になって、これは平沢さんが逮捕されて自白をする、ちょうどその間の頃ですが、捜査本部に伴繁雄さんがやって来て「あれは誰にでも手に入る青酸カリである」と証言を翻している。「（青酸カリでは）ありえない」と言っていた、同じ伴さんが「あれは普通の青酸カリだ」と。どうして見解を変えたのか、ということなのですね。これは映画の中でも出てきましたように、やはりGHQあるいはGHQの手伝い（協力）をしている旧日本軍の軍人がいまして、そういう人たちから旧日本軍の秘密事項、これはアメリカが囲い込んでいるから警察にも話してはいけない。話すな、ということをして731関係者、そして恐らく登戸研究所関係者も口止めをされた。ですから、伴さんも最初は、口止め前は「青酸カリではありえない」と言っていたのが、恐らく夏頃でしょうから6月、7月位にその様な口止めがおこなわれ、9月には完全に証言を翻し、裁判でも「誰でも手に入る普通の青酸カリだ」という

証言をして、その流れで捜査と裁判が進んでいってしまうのです。青酸カリだとなると、平沢さんでも可能だという流れが出来てしまった。その流れを作ったのが登戸研究所関係者であったということでも、登戸研究所と帝銀事件というのは幾重にも密接な関わりがあったということになります。

〔塚本〕 ありがとうございます。今はこの様に捜査関係者の手記ですとか、色々な研究資料があって、今、山田先生からあった様に軍の特殊な機関の全貌が分かってきてはいますが、私がこの映画を見ていて非常に驚いたのは、1960年代の段階で旧日本軍の暗部があれだけ描かれていた事です。映画が製作・上映された1960年代というのは、今お話にあった731部隊や登戸研究所などの機関についてどの程度明らかになっていて、また、歴史の研究者の間ではどの程度研究が進んでいたか、山田先生の方からお話いただけますでしょうか。

〔山田〕 現在では731部隊は良く知られていますし、石井四郎軍医中將という名前も知れ渡っておりますけれども、実はこの731部隊について世間で知られるようになったのは『悪魔の飽食』（森村誠一著、光文社、1981年11月）という本がきっかけですね。これは元々新聞連載だったのですけれども、この『悪魔の飽食』が出版されたのは1981（昭和56）年です。ですから、1964年にこの映画は作られている訳ですけれども、その頃こういう本は出ていなかった、その遥か前です。学問レベルでも実はこの731部隊について、初めて書かれた学術的な本は常石敬一先生がお書きになった『消えた細菌戦部隊』（海鳴社、1981年5月）です。これも実は『悪魔の飽食』と同じ年1981年、その5月で、『悪魔の飽食』よりもちょっと早く出ている。常石さんは科学者、研究者ですから、その前に論文もお書きになっています。1980年『科学朝日』という雑誌に「旧日本軍の細菌兵器開発」（常石敬一「旧日本軍の細菌兵器開発 上」、『科学朝日』40巻10号、p83-87、1980年10月および同「旧日本軍の細菌兵器開発 下」、『科学朝日』40巻11号、p84-88、1980年11月）という論文をお書きになっている。それが恐らく学問レベルで731部隊について初めて解明した論文です。それが1980（昭和55）年なのです。ですからこの映画ができた1964（昭和39）年の段階では731部隊について書かれた、まとまったルポルタージュも研究書もなかったということです。それでは731部隊について全く情報がなかったのかというと、実は1950年代から雑誌などには時たま、散発的に731部隊について恐らく当時の旧軍関係者が731部隊について暴露するという形の記事が出たことがある。映画「帝銀事件 死刑囚」の前年の1963（昭和38）年には、この（帝銀事件の）捜査をやっていた捜査員の一人である成智英雄という人、この人は731関係を追っていた特捜班の主任です。この人が退職した後で、雑誌『日本』4月号に「平沢貞通は真犯人ではない」という手記を書いていて、「これは731部隊、旧日本軍関係者

の仕業である、これが濃厚だ」と、ちょうど映画が製作される前年に発表している。その頃になると捜査関係者も一線から退職して少ししゃべるようになる。あるいは、新聞記者の中にも追及を続けている人がいて、731部隊についてところどころで発表されるようになるのです。しかし、日本軍の毒物とか、細菌戦とかの全貌は、この1964年という段階ではほとんど分かっていなかった。その段階で、恐らく関係者にインタビュー調査をしてこの映画は作られたと思います。ですから大筋において外れていないのです。731部隊と登戸研究所という極めて重要なポイントは的確に指摘をしている。青酸ニトリールの人体実験をやったということまで掴んでいる。そういう点では捜査関係者やマスコミ関係者に取材を重ねていないとできない映画であるということですね。もちろん細かい間違いはあります。(犯行に使われた)駒込型ピペットは映画に出ていたものとはちょっと違うものです。ところどころ違う点はあるのですけれども、それでも大きな間違いはない。ですから非常によく調べられた映画だと思います。

〔塚本〕 かなり早い段階で熊井啓監督がここまでやったというのは、執念とか、そういうものを感じるんですけども、渡辺先生は実際に熊井啓監督と会われた事があるんですよね。

〔渡辺〕 直接会ったのではなく電話をしたという事です。

〔塚本〕 どういうきっかけで電話をしたんでしょうか。

〔渡辺〕 それについては、私が登戸研究所を調べた時の経緯を含めながら熊井監督との出会いについてちょっとお話をしたいと思います。

先程言った様に、1987年に川崎市教育委員会の行事で登戸研究所を調べ出しました。本当に何も資料がない、語る人が一人もいない。それを何回か見学会をやって、新聞記者の方から「この辺りで細菌のせいで稲が枯れた時がある」という情報を得て調べ出しました。そして何回か見学会をやったら、一人の方が来ましてその方が「ここに勤めていた」と言うんですね。それが動物慰霊碑の前でした。「それじゃあこれ全部分かりますか」と聞きましたが、全然(知らない)。「ここは秘密の所だったから、分からない」。そういうところから始まりました。そして、困ったなと思っていたら、「戦後40年を過ぎてだんだん苦しくなった。ここでの事は墓場まで持って行くという約束で解散した。(若い頃の話ができないので)青春時代を全部失った事が苦しかった。最近、道で会うと少しずつ挨拶するようになって、今、名簿を作っているんだよ」って言うんですね。それで「名簿に載っている人は話をしてくれますか」と聞いたんですが「いや、誰も話さないよ。そういう(戦後も登戸研究所の話はしない)事で別れたから」。そうしたら、高校生が「じゃあ、アンケートに答えてもらうのはいいですか」「それはいいかもしれぬ」。そういうことで川崎市教育委員会からアンケートを出したら99名中26名から返事がきました。その中の一人の女性が、15歳で勤めた女性が「資料を持ってい

る」と書いているんですね。どこに行ってもなかった資料を何故持っているのか。行ったら「雑書綴」という960頁以上の和文タイプの綴りだったんですね。その女性はタイピストとして雇われたけど、うまくタイプ出来なかったから練習して何とかうまくなるために、(タイプ見本として)極秘でない文書を綴ることを許された。それが1987年に我々に提供されて、それをずっと分析して出したのがこの『私の街から戦争が見えた』(川崎市中原平和教育学級編, 教育史料出版会, 1989年7月)という本です。これが出たのが1989年だったんです。この前後が極めて私たちにとっては大事な時期でした。その人たち(元勤務者たち)が登研会というのを作る。そして碑を建てるという取り組みがあったんです。(生田)神社に行きますとこういう碑があります。登戸研究所跡碑、そこにはこういう事が書かれています。「過ぎし日は この丘にたち めぐり逢う」。要するに昔の事、戦後も40年間沈黙して、やっとこの丘に立ってめぐり逢って、そろそろ話をしてもいいかな。こういう句を詠っている。この碑を建てたのが旧陸軍登戸研究所有志、つまり登戸研究所に勤めた人たちですね。その代表が伴さんなんです。だから、この碑が、私たちが重要な事を知るきっかけとなった碑です。ですから、あそこは是非見ていただきたいと思います。それでこの本ができると、全国に放映されNHKでも報道されて全国的に評判になりました。そうしたら1989年に、赤穂高校(長野県)の平和ゼミナールから「私たちも登戸研究所を追っている」と照会がありました。これがすごい新しい展開になるんですね。同じ登戸研究所でも向こうは登戸研究所が疎開した先です。そこには伴さん、北澤さん、杉山さんという人が戦後住み着いていたんです。それで1988年に「雑書綴」から伴さんが(毒物開発の)中心だと分かって私が電話をしたんです。そうしたら「何も話す事はない」ガチャンと切られたんですね。何故そんな事になったかという、実は1987年に平沢貞通氏が獄中で死にます。そして伴さんが取材攻めにあうんですね。「登戸研究所が関係しているんじゃないか」「あんたが関係しているんじゃないか」とか。だから会いたくなかったんですね。特に大人には会いたくなかった。そういう時でしたから、相当問題だなと思いました。

そして1989年にもう一つ私にとって決定的な出来事がありました。今日の映画では平沢さんが死ぬまではやりませんでした。平沢さんが1987年に獄中死したけど娘さんがアメリカだという事で再審請求ができなかったんですね(再審請求は本人またはその家族にのみ認められている)。19次までは平沢貞通氏が生きていました。その後の再審請求をどうするか困って森川さんという人の息子さん、武彦さんが「私が引き受けましょう」という事で、(平沢家に養子縁組して平沢武彦氏となり)裁判を引き継いだんです。武彦さんが『私の街から戦争が見えた』の本を見て(渡辺賢二氏が当時勤務していた)法政二高に尋ねてきたんです。その時に提供されたのが、この二つの資料で「捜

査手記「帝銀毒殺事件」, 甲斐という刑事がまとめていた登戸研究所の資料が私たちに提供されたんです。これを見ると、青酸ニトリールを実験した様子を、1948(昭和23)年4月に伴さんの家にわざわざ刑事が来てものすごく克明に聞いている。そこで青酸ニトリールを南京で人体実験したことを全部述べていて、「あの(帝銀事件で使われた)毒物は青酸ニトリールで、青酸カリではないのではないか。」と話しているんですね。それを聞かれるのがすごく嫌だったんですね。従って、伴さんは本当に話をしてくれませんでした。しかし、他の事については高校生を連れていくと話してくれるようになったんです。これが1989年です。これは資料館にもありますが、伴さんが高校生に向かって話している写真、これは1989年8月5日に撮影しています。伴さんの前に『私の街から戦争が見えた』の本が置いてあります。これを私たちは伴さんに届けたんですね。その時も「おお、いい本ができた」くらいしか話をしてくれなくて、ほとんど話してくれませんでした。こういう高校生を通して少しずつ話すようになっていきました。しかし帝銀事件に関しては一切口を閉ざしていたんです。それを私たちはこういう帝銀事件の捜査記録がありますから、話せないんだなと思って、じっと待ち続けたというのが伴さんとの出会いです。しかし、こういうことをやって、私たちは、法政二高の生徒と赤穂高校の生徒が『高校生が追う陸軍登戸研究所』(長野・赤穂高校平和ゼミナール 神奈川・法政二高平和研究会編, 教育史料出版会, 1991年3月)という本を出します。これが1989年から調べて1991年に出したんです。この本を出す時に、木下健蔵先生(長野・赤穂高校)が、熊井啓監督に協力を得たいというような事を話して、知り合いになって、この本の原稿をその事務所に私が届けました。そして推薦文を書いてくれないかと言ったら、書いてくれたんです。その内容を読み上げますと「すいせんの言葉 熊井啓 私は昭和39年に『帝銀事件 死刑囚』を、続いて翌年『日本列島』を監督しました。この二本の映画には『陸軍登戸研究所』の戦争犯罪が深く関係しております。それで研究所が戦争末期、上伊那地方などへ疎開、謀略や毒薬兵器の研究をしていたことは知っていましたが、内容については不明な点が数多くありました。それを今回この本によって良く知ることができ、非常に驚き感動しました。/この本から受ける驚きと熱い感動は、戦争をまったく知らない高校生たちによって、過去の重大問題が調べあげられ、湾岸戦争にまでつながる今日的な問題として静かに訴えかけられているところにあります。/これほど戦争と平和について、若い人たちが真剣に取り組んでまとめあげた本を、私は知りません。生きた教育の成果とも言えます。ぜひ多くの方々にお読みいただきたいと思います。」(本文は/で改行) こういう文章を熊井啓さんからいただいて、これが結構、この言葉と共に広く、若い世代にも広がるものになったと言えます。

[塚本] ありがとうございます。先程、渡辺先生からお話のあった碑は、生田駅方面にお帰

りになる途中に神社があります。その境内にありますので是非帰りに見ていただければと思います。

渡辺先生は高校生たちと新たな事を色々発掘して、熊井啓さんからも賞賛された訳ですけれども、実際に登研会に渡辺先生も入会というか、紹介されて入って、登戸研究所員の方から色々お話を聞いて、帝銀事件についても伺っていると聞いていますが、実際に伴さんですとか、青酸ニトリールを管理していた北澤さんとはどんな話、どんな噂話をしていたのか聞きたいのですが、お話いただけますでしょうか。

〔渡辺〕 登研会というのは、登戸研究所に勤めていた人たちだけの会で、この中で色々話し合う場でした。戦争を賛美したり、あるいは何か歌ったりするような場ではなかったです。みんな知らないセクションで働いていたのを、お互いに話し合って相互理解をする場でした。ここでも伴さんは、1993（平成5）年に亡くなるんですが、1991（平成3）年までこの碑をきっかけにして仲間呼びかけて原稿を出してもらって、登戸研究所のことを高校生に伝えただけではなくて、本として出したいということで色んな人から原稿を集めていたことが分かりました。そうした中で伴さんの本が後で出てきます。これについては後でまた触れます。登研会が多い時は100名以上集まりますが、少なくとも十数名。その中に1992（平成4）年に私だけが入ることを許されて、1993年から明治大学の同じ研究している先生方も入り、後には映画監督の楠山忠之さん（2012年公開映画『陸軍登戸研究所』の監督）が入って映画にもなりましたが。登研会の人が本当によく参加を認めてくれたなあとありますが、その理由は、やはり自分たちがやった事を客観的に知りたいという思いがあったんだと思います。その中で北澤さんは青酸ニトリールを配分する係りの人で、作る経過だとかは知らない人ですから、案外正直に話していました。そして、1980年代から高校生に話し出したんですが、「あれ（青酸ニトリール）は登戸研究所が作った。（終戦直前に）憲兵隊とか陸軍省に2,300本配布した。それが（帝銀事件で）使われた可能性があるんじゃないか。」という事をずっと登研会では話していました。ただし、伴さんとか製造に関わった方は戦後一切話を、その中（登研会）でもしませんでした。そういうところですから、全体としてどうなったかは確認する事まではいかないまま、1990年代は過ぎます。しかし、帝銀事件の捜査記録から見ても、登戸研究所が作った毒物が関係したんじゃないかと心では思っていたんですが、それを話すと直ぐに怒って逃げるような人たちが何人かいた感じを掴みましたので、ずっと話すのを待ち続けたんです。そういうのが登研会の状況でした。しかし、話せる事は色々話してくれて、資料も出ました。伴さんが提供してくれた資料は資料館にいっぱいあります。石井式濾水機の濾過筒など、どこにも無いようなものが提供されています。そういうような形で、登研会の人が私たちに協力してくれて登戸研究所資料館が出来上がった、

こういう経過になっています。

〔塚本〕 重要なのが、先程先生から紹介のあった伴さんが書かれたこの本（伴繁雄著『陸軍登戸研究所の真実』、芙蓉書房出版、2001年1月）の原稿、実は当館で保管されています。今、企画展で展示もしています。それは元々渡辺先生が所蔵されていたもので、どういった経緯でこの原稿を入手されたのか。実はこの原稿には帝銀事件について伴さんが触れている部分があります。しかし実際刊行された本には帝銀事件については掲載されていないんです。それはどういった事なのか、渡辺先生、教えていただけますか。

〔渡辺〕 伴さんは1989年位から登戸研究所の真実を伝えていきたいという仲間から原稿を貰いまして、800枚以上の生原稿を書いています。それは最後は全て私が貰いますが、1991年にほぼ完成して、ある出版社から出す準備をしていました。しかし、それが出版ならず1993年に伴さんは亡くなります。その膨大な原稿がそのままご遺族、奥さんに残ったんです。伴さんの聞き取りに生前から関係していたので、奥さんはそれを何とか本にしたいという思いを私に寄せて、資料を全部見てくださいという事でいただきました。それを本にまとめたのが『陸軍登戸研究所の真実』（同前）です。これは伴さんが亡くなってから7年後位に本にしたものです。この中で、伴さんは何を訴えているかというと、青酸ニトリールを人体実験した事を克明に認めました。そして、たとえ戦争中といえども、中国南京で人体実験をした。これは戦争中といえども、捕虜といえども、やってはいけない事をやった。申し訳ない。冥福を祈る。と書いています。その文は本当に正直なものでしたから感動しました。そして、その所を書いた時に奥さんに向かって「お前にも長い事すまなかった」と謝ったんです。奥さんはそれまでは、この人は悪魔の世界に引きずり込まれたように苦しみ続けていた。しかし、これを書いた後はホッとしたような顔をした。そして亡くなっていったんです。そして戦後編も実はずっと書いていたんです。ところが戦後編を見ると極めて、何と言うか、私から見ても色んな齟齬があるんです、原稿が。3通り位あるんですね。その中心的なものは、帝銀事件についてです。警察に「犯行毒物は青酸ニトリールだ」と語ったことについて、あれは警察の思い違いであり、当時から今に至るまで一貫して自分は青酸カリだと思っていると書いています。結局最後まで、青酸ニトリールで人体実験をした事は認められども、帝銀事件の真実については書いていない。伴さんから貰った資料の中には、帝銀事件の平沢貞通氏が捕まった後、警視庁から呼ばれて、検事たちと一緒に「捜査方針を再検討する。ついでには再鑑定をしる。」という形で申し入れがあって、6日間かけて分析して「あの毒物は青酸カリだ」という報告を提出している。そういうものを書かされている。そして裁判でも「あれは誰でも手に入る青酸カリだ」と証言している内容も、伴さんは持っていて私たちに提供してくれました。これは何か圧力が加わって、青酸ニトリールだと

思ったのを転換したんだと。その事については話せないまま死んだんではないかと、私は今でも思っています。その背景はまた山田先生に話してもらおう事にして、それと共に、それに輪をかけて、正直に書こうとした思いがあります。それは米軍の備員になっていく経過です。1948（昭和23）年にGHQ技術院に呼ばれて山本憲蔵（登戸研究所第三科科长）と伴さんがギブ・アンド・テイクを持ちかけられてたという事を書いています。1950（昭和25）年から米軍の備員となって協力をしていく。伴さんは、戦前は国家によって翻弄されて人体実験なんかをした人が、戦後は米軍によって結構翻弄されたんじゃないかと、私たちは伴さんが残した手記から推定しているという事になります。

〔塚本〕 ありがとうございます。今、非常に興味深い点が出て来たんですけれども、そろそろ時間になってしまいましたので今日はここまでとさせていただきます。5月4日にこの続きを更に深く掘り下げて、たっぷり2時間かけてお伝えします。ぜひ、5月4日13時から恐らく同じ会場で開催する予定ですので、皆様にお集まりいただければと思います。そのために山田先生と渡辺先生も調査研究を続けられるという事ですので、楽しみにしててください。最後に、山田館長からお願いします。

〔山田〕 本日は不手際（映画上映の際、座席が足りなくなる）がございましてご迷惑をおかけしました。資料館がおこなった企画でこんなに人が集まったのは私が知る限りありません。本当にありがとうございます。今後ともご意見をお寄せいただきまして、資料館の展示あるいはこの様な企画を充実させていきたいと思っておりますので、忌憚のないご意見を頂ければと思います。どうも本日はありがとうございました。

#### 〔追記〕

本稿は、2019年2月23日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールにて開催された映画「帝銀事件 死刑囚」上映会後トークショーの書き起こしに加筆・修正したものです。本文中の（ ）内は資料館による補足です。